

## 論題 中世における神秘思想

司会 中央大学 熊田陽一郎

提題：クレルヴォーのベルナルドゥスにおける  
恩寵と人間的自由

長崎純心大学 稲垣良典

提題：存在の神秘——トマス・アキナスを  
通して

東京大学 宮本久雄

(於 東京大学 1994. 11. 15)

司会

熊田陽一郎

神秘思想についてのシンポジウムはこれが三回目である。前回はギリシャ教父思想についての討論が行われたが、今回は西欧中世における神秘思想として、クレルヴォーのベルナルドゥスとトマス・アキナスというかなり資質を異にする思想家について、稲垣・宮本両氏が提題されることになった。両氏の発表において共通していたことは、神秘というものが人間の通常の生の営みから切り離された何か特殊なものではなく、むしろ生の中にその本質的契機として内在しているものだと言うことである。

先ず稲垣氏はベルナルドゥスの“恩寵と自由選択について”という書について論じたが、これは従来、神秘思想と言うよりはむしろ教義学的人間論の著作としてみられていたものであり、この選択にもすでに氏の意図が働いている。ここで考察の出発点となったのは、ベルナルドゥスにとって人間の自由な選択こそが神の救いそのものとして考えられたことである。“consentire est salvari”。もちろん救いについてはその発端・進展・完成のすべてが神の恵みとして理解されているのだが、そこで人間の側から発すべき唯一の契機、即ち自由意志による同意について、ここにこそ正に神が働き、神が現存していると言うのである。それ故救いは神と人間の共同する神秘の業であり、これは

そのまま神の受肉、即ち人間となった神の神秘に連なるものである。人間となった神は我々人間の深みにおいて、決定的な同意の言葉を語る。我々は我々にとっての唯一の自発的契機においてこそ、我々に現存する神の神秘に直面する。

このような人間的な行為における神の現存は、宮本氏の所論にも現れて来る。即ち人間のもっとも基本的行為である言語の判断において、“在るもの”が他者として到来すると言う。即ち本質的实在判断において、“存在の第一根拠”としての神が、人間判断の指向性の根拠として現れて来る。これによつてのみ人間の判断は、自己の構成する世界を空しく巡回するだけの閉鎖性を打ち破って、“開放系”として自己を開くことが出来るのである。

こうしてトマス哲学を手がかりとして、人間言語の判断の中に他者なる神の現存をみる神秘思想と、ベルナル神学の中での、同意と言う人間の最深の行為にこそ神の現存をみる神秘思想とは、共に我々の日常的意識の中であつてこれを支えつつ、しかもこれをはるかに越えたものへの視野を開く。そこで我々は、我々を無意識の内に捉えている二分法、即ち一方には日常的・倫理的な生活、他方には聖者にのみ特権的に恵まれた神秘的な生活があるのだという二分法を、見直さなくてはならないのかも知れない。私が両氏の提題を聞いて感じたのは、この隔壁を破ろうとする両氏に共通の熱意であつた。我々 *ens contingens* にも、否、正に我々が *ens contingens* であるからこそ、神の恵みの手は伸びている。我々の同意と判断の内にこそ神の神秘が現れて来るとしたら、我々は正に我々の日常においてこそ神の内に抱かれ保たれているのである。なぜなら我々にとって同意と判断とは、如何なる場合にも切り離すことの出来ない、我々の生の本質的契機であるから。我々を沈黙 (*myo*) に導く畏るべきものは、我々に沈黙を許さない形で我々を浸しているのである。

しかしこれを本当に理解するためには、我々にはまだ乗り越えなければならない障害がある。これは宮本氏の書かれた前提にもあるように、“我々は言語と現実とを並べてこの両者を俯瞰し得る神の如き場にはない。人間は言語的枠組や文化的伝統の内にすでに埋め込まれている”，そして、“判断こそ学知を出発点として、一切を意識内在主義に持ち込む元兇”ということになる。このような日常的次元を乗り越えて開放をもたらす他者の到来を、万人に納得できる形で示すにはどうすればよいのか？ベルナルにおいても、“同意することは救われること”という言葉は、例えば雅歌注解の“このように神から働きかけられることは神化されること” (*sic affici, deificari est*)

にも通じるベルナルの洞察であるが、それはやはり継続的な認識ではなく、ただ“稀なる時間、僅かな間だけ” (rara hora et parva mora) 与えられる直観ではないだろうか？ そうしてみれば日常に生きる我々のなかにこの“salvari”の実感を生かして行くのは、まだまだ至難の業であろう。両氏がシムポシオンに基づいて書かれる報告が、この点についての光を与えて下さることを切望して司会者としての報告を終わる。

## 提題

### クレルヴォーのベルナルドゥスにおける 恩寵と人間的自由

稲垣 良典

I はじめに「中世における神秘思想」という主題をめぐって私が以下に行う報告の底流ともいえる一つの考え方についてのべておきたい。「神秘」という言葉の捉え方は様々であろうが<sup>1)</sup>、必要な手だてと十分な時間さえ与えられればいつかは知られるような未知の事柄が神秘（自然の神秘、宇宙の神秘といわれる場合のように）と呼ばれる派生的な意味は別として、本来の意味での神秘は「自然と超自然」「自然と恩寵」という語り方が為される場合の后者に属するといえるであろう。そして、このように超自然ないし恩寵の領域・秩序に属するとされる「神秘」が正しく理解されるか否か、つまりわれわれが神秘へと適わしい仕方と近づき、それについて語りうるか否かは、実は自然が正しい仕方と理解されるか否かにかかるところが大きい、といえるのではないか。

ここで私は議論を単純化して、われわれは「自然主義的」(naturalistic) 自然観を克服しないかぎり、神秘と呼ばれるものを正しく理解することはできない、という考え方を提出したい。「自然主義」という言葉は色々な意味で用いられるが、ここでは自然を包括的な意味（自然を精神ないし歴史と対置させるのではなくて、後者をふくむものと解する）に解した上で、それを人間理性（自然的理性といってもよい）のみによって認識されるものだけに限ってしまう立場を指す。一言でいえば「自然主義」